

# リーディングとはどういうことか

松坂 ヒロシ

型破りな記事を書いて恐縮ですが、まず、何もおっしゃらず、次をお読み下さい。

\*

むかしある国で、1年に1度だけ、どんな人でも王様に直接話をする事が許される日が設けられていました。

この日は、王様は、ひとりで、お城の中や町の大通りを歩いて、いろいろの人に話しかけたり質問を受けたりしました。

王様がお城の中の馬屋の前を通ったときに、馬屋の掃除係のジャックという男が王様に言いました。

「陛下、私は、この国のしくみが不公平だと思います。王様はいい服を着て、おいしいものを食べています。私は、毎日こんなものをして馬屋の掃除をしています。同じ人間なのに、不公平ではありませんか。」

王様は、こう答えました。

「○○○○○」

何年かたって、この国が戦争をすることになりました。ジャックは、お城に攻めてきた敵と勇敢に戦いました。このことが王様の目にとまり、ジャックは別の役に立ってられました。その後、彼は、さまざまの役目を経て、とうとう、大臣になりました。

大臣になると、毎日、大切な決定を数多く下さなくてはなりません。判断をひとつ誤ると、大変なことになります。自分がその地位を失うかもしれません。国が減じるかもしれません。ジャックは、判断を誤らないように、必死の努力をしました。本を読んで国の中のことを詳しく勉強しました。学者を屋敷に呼んで意見を聞きました。学者のなかには、意地悪をして、正しいことを教えない人もいました。そんな人を見抜くのも大変でした。また、意地悪をされないように、発言にも気をつけました。一日も、一刻も、気を抜くことが許されません。毎日が綱渡

りのようなものでした。

「ああ、おれは、馬屋の掃除係のままでいたほうがよかったな。」とジャックは独り言を言いました。「なぜ王様があのとき馬屋の前であんなことをおっしゃったか、よくわかった。」

\*

この文章には、問題がついています。

文中の「○○○○○」にはどのような内容が入りますか。別段、正解として、特定のことが決まっているわけではありません。どのようなことばで表現しても結構です。自分で文を作って下さい。こういう問題です。

\*

読者諸氏にとっては、もちろん、この問題は簡単であるに違いありません。ここでわかりきった答えをわざわざ申し上げるつもりはありません。

私が申し上げたいのは、むしろ、次のようなことです。

問題文に、「自分で文を作って下さい」とあります。これを見て、この問題が作文の問題だと思った人がいたら、この人は、失礼ながら、あまりものがよくわかっていない人です。確かに答えるのに作文力も多少要るとは思いますが、その作文は大した作業ではありません。

この問題の眼目は、読解力を試すことです。「○○○○○」の内容は、文章の論理をたどる力がなければ、特定できません。

読み手は、文中で扱われている因果関係を理解する必要があります。ジャックは、新しい境遇が原因となり、ある感想を抱くに至りました。ここにひとつの因果関係があります。その感想とは、具体的には、大臣の立場が自分に大変な苦勞を強いている、という困惑です。次に、この困惑が、ジャックに、

以前聞いた王様のことばを思い出させます。これも因果関係です。では、その因果関係が成り立った、その原因は何か。つまり、立場と苦勞との結びつきが、なぜ王様のことばの記憶につながったのか。それは、王様のことばの内容が、その結びつきに整合するものであったからに他なりません。ということは、逆算すれば、王様が言ったことは何か—

読者諸氏に私からこれ以上申し上げる必要はないでしょう。

この物語のなかで、抜けているのは王様のセリフだけです。セリフの内容は、わずか1行か2行で言えます。それ以上のものではありません。しかし、このわずか1～2行がわからない人がいたとしたら、この人は、1～2行どころか、文章全体が全くわかっていないと言わざるを得ません。

冒頭にあのような物語を書くことにした理由は、リーディングの本質を論じたかったからです。リーディングは、文字を追うこととは違います。音読とも違います。暗唱とも違います。文章が外国語で書かれている場合、その文章を訳読する読み手もいるでしょうが、リーディングは訳読とも違います。訳読、音読、暗唱のすべてができて、リーディングには失敗した、ということは、十分あり得ます。

リーディングは、「要するに筆者は何が言いたいか」を読者が読み取ったときにのみ、成功します。読者が、深いレベルにおいて、筆者と自他一如の状態になるときにのみ、成功します。

確かに、リーディングをしようとする場合、当然、単語もわからなくてはなりません。文法も必要です。これらは、時として *microlinguistic* という形容詞でくられる事項です。リーディングにおけるその重要性は、少し考えればわかることですが、特に、われわれ外国語教師は、このことを人一倍知っています。なぜなら、外国語でものが読めるようになるためには、単語や文法の知識をゼロから努力により構築しなくてはならないからです。努力が足りない場合には、リーディングもうまく行きません。問題の知識がリーディングの成否に直結していることが、いやでもわかります。

しかし、です。単語や文法の能力は、いわば駅の「入場券」です。入場券で列車には乗れない。筆者とともに、つまり、筆者と自他一如になって、筆者の心の中の世界を旅しようとするれば、入場券以上の

ものが必要です。語学教師は、入場券を売って、それを乗車券だと呼んではいけません。これら2種類の券は、別物です。

ものの本を見ると、よく、ディスコースという用語で、このことが説明されています。ディスコースのレベルで理解ができなければ、ことばを理解したことにならない、というわけです。まあ、用語はどうでもよいでしょう。要は、筆者とともに旅ができるかどうか、ということです。ホームには立てたが、列車を見送って帰って来た、ということでは悲しいです。乗車券が入手できるよう修行することが、リーディングの勉強です。

\*

私は、数研出版の『BIG DIPPER Reading Course』というリーディングの教科書の著者に加えて頂きました。いま、作業の過程を思い起こすとき、その重要な部分は、リーディング力の要素さがしであったように思います。上述の因果関係をはじめとして、時系列の把握、主張と根拠の関係の把握、例示の理解など、リーディングに必要な能力は多種多様です。これらの能力について、編集会議において、他の著者の先生がたと突っ込んだ議論をしました。

この議論を通して、私は、リーディングとはこんなに面白いものか、ということのを再認識しました。私は、教職にあり、ものを読まざるは商売にならない立場にありますが、リーディングということ自体を真正面から見つめる機会は日頃あまりありません。教科書製作の仕事を通して、そのような機会に恵まれました。

\*

教科書を通して、高校生が、十代の若さから来る感受性をもって、本当の意味におけるリーディングの楽しさをつかんでくれたら、こんなにうれしいことはありません。

(早稲田大学教育学部教授)